

学生の学びを広げ深めるための一手法 ～視写の教育を通して～

宍戸 洲美

帝京短期大学

One method to broaden and deepen student's learning
~educating through transcribing newspaper editorials~

Sumi Shishido

Teikyo Junior College

Key word : 視写・新聞の論説・養護教諭

要 旨

若者の活字離れが進み、文章を読み書き理解する力が低下しているといわれている。本学の学生にも同様の傾向がみられる。養護教諭を目指す学生にとっては教師として必要な基本的能力である、読み、書き、理解し、考える力を持っていることは重要である。主に専攻科の学生を対象にこの力をつける一つの方法として新聞の論説やコラムを正しく視写し、論説に対する自己の感想を書く方法を試みたのでその結果を報告する。

1. はじめに

養護教諭の仕事は、その時代の子どもの健康問題に合わせて自ら考え創造的に仕事をしていかなければならない。そこに求められるものは、教師としての基礎学力であり、日常的には新聞や本を読み、そこに書かれていることを理解し、さらにそのことに対して自分なりの考えを持つことである。つまり、「読み」「書き」「理解する」「自分の考えを持つ」などの力が求められる。それ以前にも養護教諭として正規に仕事につくためには教員採用試験を突破していかななくてはならない。その試験にほとんどの都道府県が論作文を導入しているため、これをクリアする必要がある。

最近活字離れが進み、新聞を購読している家庭は少ない。社会の動きや最新のニュースなどは、TVやスマホなどで配信される情報から得ることが多く、日常的に活字で文章を読む機会は減っている。また、手紙を書いたりもらったりする機会は皆無に近く、伝えたいことはメールやラインで、しかも意味が丁寧には伝わらない絵文字が氾濫する。ものごとの理解は、まず国語力が基礎になる。文章が読めたり書けたりしなければ、その先にある理解力も当然弱くなる。

こうした懸念を持っていた矢先に池田久美子氏著「視写の教育」¹⁾に出会う。

氏は同じように短期大学の教授であり、学生の学力低下という問題に直面し、「視写こそが最も役に立つ学習方法だと確信したからである。」と述べている。

この著書に出会い、専攻科の学生を中心に養護教諭に関係が深いと思われる内容が書かれている新聞の論説やコラムを視写し、その内容に対して感想を書かせる取り組みを行った。約3年間取り組み、それが学力の向上に役立ったかどうかまでは検証できないが、確実に誤字・脱字は減少し感想や自分の意見も書けるようになってきている。

2. 研究方法

- 方法 新聞の論説を視写させて感想を書かせ、その変化を見る
対象 専攻科養護教諭専攻の学生、一部本科の学生は年度で入れ替わっている。
期間 平成23年度～現在

3. 研究結果

(1) 学生の気になる実態

ノートテイクに非常に時間のかかる学生が増加している。時間がかかる原因を追究して見ると、特に難し

い漢字を使っていなくても読めない漢字が多い。そのため、一字一句、絵を書き写すように書いている。また、新聞の記事を読ませたところ、段落がどのように流れているかわからず、そのまま横に読んでいき、異なる記事なのに平気で続けて読む。意味内容がつかっていないことに気が付かない。

教科書の重要な部分を要約させる作業では、そこに書いてある要旨が読み取れなくて、初めから順番に書いていき、書くスペースが足りなくなったと訴える。

どのように文章を構成していったらよいのか分からなくてお礼状が書けない。インターネットからとってきた文章をそのまま貼り付け、前後の脈絡が合わない。時候の挨拶も季節に合っていないなど、「読む」「書く」「考える」力の低下を痛感する。最近では、黒板やスライドの映写をスマートフォンのカメラで写し、保存して黒板の板書さえノートに書かない学生も出現し始めた。掲示板の重要なお知らせは殆どの学生がスマートフォンに保存する。便利だが、手を使って書くということが生活の中から極端に減り、大事なことが記憶に残らない。

手で書くという作業が生活の中からどんどん減っていき、大切なことを話していても全くメモを取らない学生も多い。例を挙げるときりがない。

このことが、学力の低下と無関係ではないのではないか。そこで、手書きと脳の関係について調べてみた。

(2) 手書きの脳科学

かつて、曾野綾子さんが書いたエッセイか何かで「大学生まではワープロを使って文章を書かせてはいけない。手書きでしっかり考えて紙に文章を書かせる訓練が、しっかりした文章を書く上では重要である。」というようなことを書いた記事を読んだ記憶がある。手で書くことと、ワープロで文字を打ち込むことでは脳の使っている部分が異なるというのである。

私自身の経験からも、ワープロで書いた文章は何度もプリントアウトして読み直し、手で朱を入れてさらに打ち直す。この作業を数回繰り返さないとしっかりした文章が完成しない。私の場合はキーをたたいて作った文章と、手書きの文章では明らかに手書きの文章の方が完成度が高い。もう一つワープロを使いだしてから痛感していることは、覚えていた漢字がどんどん書けなくなっているということである。手で書かないと、記憶が薄れていくという事実である。

「手は突き出した脳である」と言われているが、手書きとワープロで文章を書くことの違いはどこにあるのか。脳科学の視点から追究したものがある。

東京書道協会会長河原世雲²⁾は次のように述べている。“書字と脳の研究を進めていくと、手書きとパソ

コン書字では、脳の活動が大きく異なることがわかってる。脳はその領域によって役割が異なり、それぞれの領域の機能が共調してさまざまな人間の活動を成立させている。脳の中でも、手の感覚や運動を司る脳の領域は大変広い。(中略)パソコン書字をさせるよりも手書きをさせる方が、ずっと器用に用具を使わずにはならず、脳への負担が大きいことがわかる。負担が大きいとはイコール、脳の発達を促すことになる。(中略)手書きはパソコン書字に比べ脳の広い範囲での同時進行的な活動を促す”述べている。³⁾

これ以外にも、日立は脳科学の産業応用事業として光ポトグラフィを用いて身体活動時の脳の血流量を測定している。その結果によると「手書きする際には脳が大きく活性化するのに比べ、キーボード入力ではそれほど脳が活性化しないことが分かった。手書きを行っている脳内では、ペンを動かす、読む/書く、聞く/理解する、観る、漢字を読む、書くなどの部位がまんべんなく活性化しているのに対して、キーボード入力では、打つ、聞く/理解といった部位以外の活動が非常に小さい。その結果「脳を育む」という観点からは手書きの方がはるかに勝っていると言える。」という実験結果を公表している。⁴⁾

山元大輔も『脳を刺激する習慣⁵⁾』という著書の中で「書きながらものを考えると思考がまとまり、記憶に定着するとよく言われる。なぜなら、これは記憶と運動が結びついているから」と述べている。

これらの結果から、学生の脳を鍛え学力を上げる手段として手書きを導入することは意義があると言える。

(3) 視写の取り組み

専攻科の学生を中心に、養護教諭として読んでおいた方がいいという新聞記事、特に論説を中心に正確に視写すること、視写した後読み返してみても感想を書くことを授業外での課題として出した。

用紙は、400字詰原稿用紙、縦書きを使用した。

① 視写に利用した題材

取り上げた記事には主に朝日新聞の論説やコラムで以下のようなものである。

- ・ 幼子の虐待 生まれる前から支えを
- ・ 原発への重い国際公約
- ・ 校長名公表 上位でも疑問だ
- ・ ママラさん受賞 教育は世界平等の権利
- ・ スポーツ事故 学校でどう命を守るか
- ・ 診療所火災 動けぬ患者を救うには
- ・ 薬の効果偽装 教訓導く徹底調査を
- ・ 学校の色覚検査 再開には児童のケア不可欠

- ・いじめ対策 先進例を共有しよう
- ・中国のPM2.5問題 技術支援で「政冷」克服を
- ・エネルギー計画 これがメッセージ
- ・学力格差 頑張る学校の知恵共有を
- ・リレーオピニオン「私の必殺技」
 - 一にも二にも人を見る
 - さらけ出せば心が通う
- ・学習指導要領 21世紀の学力育つのか
- ・40人学級 安易な予算削減では
- ・子どもの貧困 大人一人ひとりが動こう
- ・先生の数 現場の実態を踏まえよ
- ・問題児の分離「これで解決」ではなく
- ・生殖腺切除の強制改めよ

まず、視写を始める前に原稿用紙の正しい使い方、また、上手でなくてもいいが丁寧に書くようにという指示も出した。丁寧に書くためには原稿用紙のマスの中に「文字を置いていく」という感覚で書くとよい、などのアドバイスもした。

1回の文字数が大よそ1200字～1400字程度であり集中すれば30分程度で書ける。

②誤字、脱字の変化

誤字、脱字には自分で気が付いたら斜線で消し、行外に書き直す。初めからペンで書き、修正液は使わないで斜線で消し書き直すことにより、自分で間違いがどの程度あるのか確認できる。最初のうちは、書き間違いを自分では見落とすことが多く、こちらで読んで朱を入れて返却した。すべての学生ではないが回を重ねるごとに誤字、脱字の数が減少していく傾向が見られた。

誤字、脱字の変化を文末の資料に示した。(表1) 誤字、脱字の数は学生によって個人差があり、普通の授業でも集中力や理解力が高い学生の方が誤字、脱字が少ない傾向が見られた。ここでは示していないがGPAの数値ともかなり相関が見られる。

学生Eは、普段からよくノートテイクをしており書くことが好きだという。この課題を出すと、翌日には提出するというほど、空き時間を利用して書いてくる。書くことが楽しいといい、誤字、脱字も少ない。

一方で、なかなか提出できない学生もいる。書くことが苦手といい、普段のノートテイクも弱い。取り組むことの主旨は十分説明しているが、必修ではないのでできない学生に強制力はない。

③文字の丁寧さ

大学生では、すでに自分の癖が定着していて、それを修正することはかなり厳しい。最近気になる丸文字や、いわゆる悪筆と言われる文字は直しにくい。これ

は鉛筆の持ち方にも関係していると考えられるが、正しい持ち方ができない学生が増えてきている。幼少時期から、正しい鉛筆の持ち方や、文字を丁寧に書く訓練は昔ほどなされていないのかもしれない。小学生の鉛筆の持ち方については、養護教諭時代から気になり注意してきてきた。鉛筆の持ち方は、単に文字の上手、下手だけではなく、姿勢にも大きく影響し、視力の左右差が増えてきていることにも関係しているのではないかと。

今回の視写されたものを見ると、(図1)に示したように、はじめから丁寧に書く学生もいるが、癖があって読みにくい字も多い。しかし、癖があっても丁寧に書くように指示すると意識する学生が増えてきた。他の課題が多くて大変な時や試験前など学生の向き合う条件に影響されることもあるが、回を重ねるごとに少しずつ丁寧な文字に変化してきた。(図2・3)

採用試験論文でも文字の汚い論文は内容が良くても最初から読む気がしないという、試験官の意見はよく聞く。従って、丁寧にしかもあまり時間をかけないで書くという訓練は必要である。

④感想から読み取る学生の力量

ジャーナリスト池上彰はこのように述べている。「新聞には色々な意見や分析が載っており、答えがない事柄に対しても自分で考える力を養える⁶⁾」

また、「読む」「書く」「思考する」という一連の作業は必ずや新しい知力を養うことにつながる。本来なら、自ら新聞を読むような習慣が学生に欲しいが、一人暮らしの学生もいたり、家庭で新聞を取っていないところも多い。

この、視写の取り組みでは、残念ながら学生自らの興味や関心で選んだ記事ではなく、こちらが与えた題材である。しかも、養護教諭という職業を意識して選んだ題材で内容はかなり限定されている。

初めは、視写だけで感想を書くことは課題にしなかったが、4回目ぐらいから感想を書くことを課した。これは、池上も言っているように「自分はその事柄に対してどのように思うのか」という自己の主體的な考えを持つことの訓練になる。専攻科の修了研究論文や、採用試験の論文でも課題に向き合うときは必ず自己の考えを述べるのが重要である。

この課題は、すぐに書ける学生となかなか書けない学生がいて、感想の内容も個人差が大きい。以下にいくつかの感想を紹介する。

テーマ：学力格差 頑張る学校の知恵共有を
 学生 T
 ・学校の取り組みによって貧困と学力の負の関係

性を打ち切る効果が見られてことを知り驚きました。それぞれの学校で創意工夫し学習方法を行い教員同士や家庭、地域社会で連携を図ることの大切さを学びました。現在「manavee」という東大生がつくった無料授業配信サイトがあります。経済的に塾に行くことが困難な子どもたちのために大学生が授業を行い、その動画を配信するサイトです。初めは少人数で活動していましたが、今ではその輪はどんどん広がり他大学の多くの学生が参加し、子どもたちに授業を行っています。実際「manavee」を見て、第一志望校に合格した高校生もいます。

社説で述べられていたように、教育だけで格差を超えることは困難だとは思いますが、こうした学校の取り組みや学生の活動が今の社会制度を変えるきっかけになればよいと思います。

*この学生は、記事をもとに自分が調べた大学生の取り組みを紹介しながら、記事の内容について考え、この課題にしっかり向き合っていることが分かる。

学生A

今回の記者有識論を読んで思ったことは、親の収入が高い家庭の子どもの方が学力が高いと言っていました。それについて、私は、お金がたくさんある家は、塾に行かせる余裕があるけれど収入が低い家の子どもは塾に行きたいけど行けないのではないかと思いました。

そのためには、政府は学校教員をより良くする必要があったと思いました。例えば、教員の労働時間に見合った給料にし、5日間のある一日を早く切り上げるように決め、教員の体と心のリフレッシュさせてあげることで、新たな気持ちで子どもたちに教えていくこともできるのではないかと思いました。

*感想文に下線を引いたが、この学生の文章は主語・述語の使い方が間違っている。また、この論説で述べている貧困と学力格差の問題と、教員の労働時間短縮とリフレッシュとがどのように関連しているのか説明不足である。

学生I

視写を行うことで、記事の内容が理解しやすくなりました。

記事を読んで、子どもによりよい学習を提供するためには、外からは見えづらい部分の学校

体制、「形」より「中身」の充実が大切だと思った。

*この学生は教育実習直後にこの視写を行い、感想を書いた。実習を通して思うところがあったようで、中学校での教育活動にいろいろ疑問をもって帰ってきていた。それが「形」より「中身」という言葉に表現されている。

感想文としては短すぎるし、もう少し「中身の充実」について、この記事を引き取って考えてもらいたいところである。

テーマ：さらけ出せば、心は通う

学生N

この記事を読んで、永野さんはすごい人だと感じました。確かにありのままの自分をさらけ出せば、心は通うかもしれませんが、なかなか難しいと私は思います。きっと永野さんは相手の様子をうかがいながら上手に話を進めていたのだと思います。

また、取り調べをしている相手は悪い人だと壁をつくらないで会話している永野さんの人柄と知的な部分は養護教諭を目指す私も見習わなくてはいけないと思いました。

*大学生の感想としては物足りない。この記事に書いてある、永野さんという元特捜検事の凄さはその裏にどのような知性と人間性をもち、それはどのようにして培われていったのか、その深いところを読み取りと、これから自分は何をしたらよいのかまで考えてほしいところである。

学生T

永野義一さんの取り調べの方法は、養護教諭が行う健康相談活動と通じるものがあると感じました。相手と心を通わせ真実を話してもらうことは、健康相談活動の中でも重要なことだと思います。そのためにはまず、相手から信頼を得なければなりません。永野さんの取り調べは、まさに、それに適った方法だと感じました。被疑者に対して「お前が犯人なんだろう」といきなり核心を突くのではなく、たわいない話の中で心を通わせ真実を聞き出す方法は学ばなければならないと思いました。児童の悩みの本質を捉えるためには会話のスキルも磨かなければならないと思いました。

*この学生も養護教諭に必要な共通するものがあると、永野さんから学んでいるが、最後が「スキルを磨く」という締めくくりになっていて、できれば人格を磨くことの重要性にも気づいてほしい。少し残念に思った。

学生M

犯罪を犯してしまった人を相手にしていながらも「どうすれば相手と心を通わせられるかを常に考えていました」とあるように、相手を犯罪者としてではなく、一人の人間として向き合う構えが素敵だと思いました。

この永野さんの取り調べのやり方は、養護教諭が子どもから話を聞き出すときにも有効だと思いました。

*感想文を通して、それぞれの学生の感性も垣間見える。この学生は永野さんの人柄を「素敵だ」と捉えている。こうした感性も養護教諭という子どもに関わるうえで重要な要素である。感想文自体はそれほど深い読み取りができていない。

テーマ：40人学級復活 安易な予算削減では
学生K

財務省が国における教育に関わる費用を削減するため、小学校1年生の学級を「35人学級」から「40人学級」に戻し、教員を減らすという案を示した。社説の中でも言われているように、それは未来への投資を削減したことだ。平成20年に改訂された学習指導要領や平成26年に文部科学大臣が中央教育審議会へ諮問した中にも「生きる力」を身につける教育が必要であると記されている。「生きる力」を身につけるためには、まずは学力をつけ、それを基礎にした考える力を養っていかなければならない。教える児童の人数が多いほど教員は個々の児童の理解度に合わせた指導は難しい。また、考える力を養う際に、子供はほかの子供の考えを聞いて、さらに自分の考えを深めることがあるが、大人数の学級では、個々の考えの発表に時間を取られてしまい、教員がそれぞれの考える力を伸ばそうとすると指導が十分に行えないおそれもある。子供の学力、考える力そして「生きる力」を伸ばして行くためには、費用削減のためだけに学級の児童数を増やすのではなく、一人一人に教育が届くよう少人数で構成することが必要だと考える。そして、一人ひとりに教育が届く

ということは子供それぞれの心身の健康問題にも目が届くということである。子供は自分の健康問題に気が付かなかつたり、口に出せなかつたりすることがある。心身の健康問題を教員が早期に発見し、養護教諭に繋ぐことで、学級内でも注意して観察することができる。また、その中で、発達障害児に対するその子にあった教育を行っていく上でも、少人数学級であるほうがより細やかに行えるものと思われる。

子供の生きる力の向上、心身の健康を守り、その保持、増進の為には、一人一人を見ることが出来る人数でなければならない。

*この学生は問題に正対し、しかも関連した情報もしっかりつかんでいる。その上で養護教諭として子供の健康問題に引き寄せ記述している。ここまで書ける学生もいる。

こうした感想文を通して、それぞれの学生の持ち味や力量が見える。

感想が書けない、あるいは書いてこない学生もいるが、学生TやKはどのような記事に対しても必ずその記事に関連した他の情報にも触れて書いてくることが多い。社会事象に対して日常的に興味や関心を持ち、それに対して自分なりの考えを述べることができる。

多くの学生に、このレベルまで達してほしいと思うが、どう鍛えていくかはまだ試行錯誤している段階である。(注：学生の感想文は原文を忠実に再現した。)

4. まとめ

池田氏は国語学の専門家であり、「視写の教育」についてかなり専門的に学生が書いたものを添削し、評価している。

私自身は国語的な素養がそれほど深くはないので、学生に対しても国語力をつけていくような本格的な指導はできない。しかし、この取り組みを通して、学生に読み・書き・理解し、考える力をつけることは可能であることが見えてきた。その成果がでたという客観的な証拠はまだ殆どないが、授業以外にこうした学習体験をさせる意義はある。一つは学生自身が記事に触れて、自分なりの感想を持つようになったこと。もう一つは、私自身が、学生の感想を読んだり、書かれたものを点検していく過程で学生の国語力や考え方に触れ、学生理解ができたことである。

特に、短期大学では殆どの科目が資格取得のための専門科目であり、学力の基礎を補うような教科がな

い。

本学に入学してくる学生の学力も二極化に近いものがありGPA 4に近いものから1以下のものまでいる。

特に学力の低い学生にこそ、基本的な読み、書き、考える力をつけていくことが必要だと考える。「専門性を超えてできることは何か」と考えたとき、この視写の試みは有効ではないか。

<参考文献>

- 1) 池田久美子著シリーズ『「大学の授業」視写の教

資料

表1. 誤字・脱字数の変化

数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
学生A	9	7	5	4	4	4	4	3	2	1
学生B	11	9	8	6	5	5	4	4	4	2
学生C	36	9	14	10	7	6	4	4	2	2
学生D	30	9	10	13	14	11	8	5	5	4
学生E	5	2	0	3	0	1	0	0	0	0
学生F	3	0	3	1	0	1				
学生G	6	2	2	3	2	1				
学生H	2	4	4	1	1	0				
学生I	7	2	5	2	5	2				
学生J	2	1	3	2	3	1				
学生K	1	1	0	1	0	1				
学生L	0	1	0	1	0					
学生M	1	3	0	1	2					
学生N	3	1	2	1						
学生O	1	1	0	1						
学生P	5	3	1	2						

育』東信堂

- 2) 河原世雲 書道家・東京都書芸教会会長
- 3) 教育新聞 『脳科学から手書き・書道の意義』 2015年5月14日
- 4) HITACHI 未来インターフェース
- 5) 山元大輔著「脳を刺激する習慣」PHP p146
- 6) 朝日新聞2015年11月21日朝刊「新聞はこう読むんです」ジャーナリスト池上彰



図1. 学生Eさんの視写



図2. 学生Bさんの視写

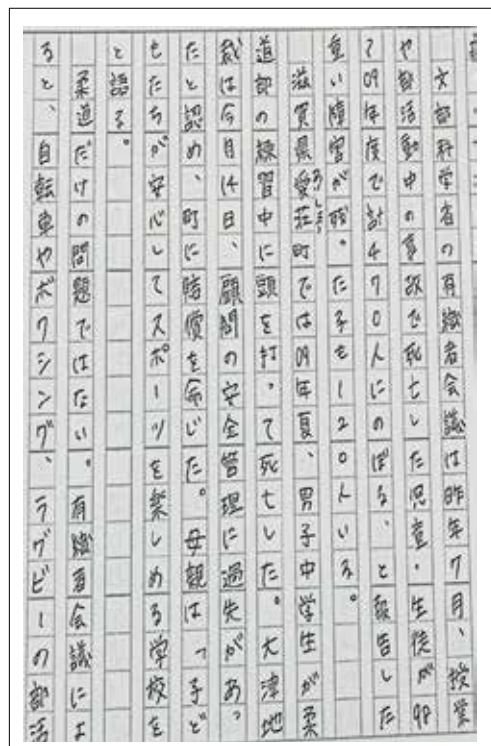


図3. 学生Bさんの視写